

時の祖母の喜びようはなかった。まるで、自分が帰依している佛にでも会ったかの如くであった。時期的に佛花に事欠く頃だったから余計喜んだのだと思う。私はその時の祖母の顔が忘れられず、一緒に生活していた間は毎年のように猫柳を採りに出かけた。

大学を出て十勝の高校に勤めるようになり、いつしか猫柳採りも遠のいたが、札幌へ転動して北区の郊外に住むようになって、再び始まった。しかし、祖母はすでに亡くなっている。それでも猫柳を採り続ける私は、あるいは祖母の喜びの顔をさがし求めているのかも知れない。

## 百人一首の植物(1)

松木 裸志

「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじなもゆる思ひを」

藤原実方の作。自作歌を藤原行成がけなしたのを怒り殿中で相手の冠を叩き落した為に陸奥守に左遷されて死んだ。才気煥発の作歌人で刺撰集にも64首ある。この歌は縁語の多いもので「いふ→いぶきを→さしも草→燃ゆる思→ひ(火)とつながる。つまり「私のこんなに燃ゆる恋心を知らないのですか」という意味で、後世芭蕉も奥の細道で多感なこの詩人の薄命の死をはかなんでいる。サシモグサは差艾と書きヨモギの古名である。古来から薬用植物でお灸の原料。

「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」

紀友則とは、貫之のいところで36歌仙の一人。刺撰集に6千首あり、古今集撰者の一人だった。ただ花とあるだけだが、やはりヤマザクラを見ての作。

サルメンエビネ



オオハナウド